正修殿第三分館藏書

庄野潤三全集

庄野潤三全集　第一巻

昭和四十八年六月二十日　第一刷発行

著　者　庄野潤三
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一・郵便番号一一二
電話　東京(〇三)九四五一一一一(大代表)・振替　東京三九三〇
印刷所　図書印刷株式会社・株式会社興陽社
製本所　大製株式会社
製函所　株式会社岡山紙器所
定　価　一六〇〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©庄野潤三　昭和四十八年　Printed in Japan

0393-131917-2253 (0)　(文1)

庄野潤三全集　第一巻　目　次

《愛撫》

愛撫 9

舞踏 43

メリイ・ゴオ・ラウンド 69

スラヴの子守唄 84

会話 108

噴水 120

恋文 138

喪服 156

流木 169

《プールサイド小景》

黒い牧師 207

臙脂 225

紫陽花 239

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装　幀・岩　本　正　雄
口絵写真撮影・野　上　透
（昭和48年4月、生田緑地にて）

結婚 258
プールサイド小景 275
十月の葉 299
団欒 318
伯林日記 339
桃李 358
《旅人の喜び》* 391
三つの葉
《習作》 409
罪 412
貴志君の話 417
ピューマと黒猫 424
庄野潤三ノート 阪田寛夫

庄野潤三全集　第一巻

本全集では、これまでに刊行された単行本を、小説と随筆に分けて、出来る限りそのままのかたちで年代順に収めることにした。収録枚数に大きなひらきが生じる巻のみ、やむを得ず、分散して載せた。『旅人の喜び』『丘の明り』『絵合せ』がそうなった。分れて入った小説については、第一巻の「三つの葉」のように、扉に本の題名をしるし、＊の印を附けた。

著　者

愛

撫

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

愛撫

秋築先生のことについて、ゆうべもあの人は私に聞こうとされた。

いったい、どういう風に話せば、満足するのか知ら。この四五日というものは、毎晩毎晩、同じ質問の繰返しばかり。どうして、飽きないのかと思う。またか、と思うと、うんざりして、すっかり興覚めした顔になるのに、それでもあの人は構わずに、しつこくしつこく尋ねようとされる。あたしが興覚めした顔をしているのがはっきり分っているくせに、それでも無理矢理に、あたしにしゃべらせようとして、自分ひとり、ああ云えばどうだろう、こう聞けばどうだろう、とそれこそあの人の知慧のありったけをしぼって、向って来るのだ。それは見ていて本当に痛々しいほど努力を傾けて居られる。滑稽なほど——とあたしは書こうとして、痛々しいほどと書き直した。あたしにはもう笑う気持さえ起らない。それこそ一生懸命なのだ。何度あたしは思ったか知れない。あの人が、あれだけの熱情と粘り強さで物を書いたら、きっと素晴らしい迫力のある作品が生れているだろうにと——。それも、あたしが毎日毎日、問われるままに、あの人にとって全く未知の事実を告

白するのであれば、あの異常な熱心さも理解出来るのだけれど、あたしの答える事と云っては、最初の晩に云った事実より何一つ外には無いのだもの。次々と隠していた事が明るみに出てゆくのではなくて、最初からただあれだけのことで、それ以下でもそれ以上でもない。それはあの人だって分っている筈なのだ。ちゃんと知っているのに、それを自分でわざわざ大変な苦労をして、ああ云えばどうだろう、こう聞けばどうだろう、とこわれたことの明瞭な玩具の自動車のぜんまいを何度も巻いたり戻したりする子供のように、聞分けがない。

これまでにだって、思い出して見れば、これと似た事がなかったわけではない。そして、執拗さにしても、或は今と同じくらいであったのかも知れないけど、ただその当時——結婚してあまり時間の経過していないその頃には、同じようにしつこい夫の態度にしても、平静を失っていたあたしには、強い愛情の表現と思って済ますことが出来たのだろう。あたしは熱にうかされたような状態であった。あたしは——今から思うとずいぶん馬鹿だったと思うけど、あの人に夢中になっていた。一日中、何も仕事が手につかずに、ぼーっとして自分で自分のしていることが分らない。ただもうあの人のまわりを夢遊病者のようにうろうろするしか能のないような私であった。女学生時代のあたしは、もみくちゃにされて影も形もなくなっていた。それは、あっと云う間に大風が吹き込んで来て、眼の前にあった一切のものを吹き飛ばしてしまったような具合であった。結婚するまでのひろこは、何処か遠くへ姿を隠してしまった。

（ひろちゃんは、変ってしまった）

あたしの親しかったお友達は、驚きと怨みの気持をこめて、あたし宛の手紙の中にそう書いた。あたしのお父さんもお母さんもそう仰言った。あたし自身、それをはっきり感じていた。

（昔のひろこは、何処へ行ったの？）

あたしはよく一人きりで自分の心に囁いた。しかし、そこにあるのは、昔のひろこと確かに違う、見覚えのない、大変心細い様子をした、永い永い熱病にかかったような、あたしであった。そして、そのあたしの前には、ただあの人の胸が見えるだけであった。あの人が笑えば笑い、あの人が不機嫌になれば悲しみ、あの人が眼の前にいると物が云えなくなり、あの人が出掛けてしまうと呆けたようになってしまうのであった。あたしの世界というのはあの人なので、つまりあの人の外にはあたしは何も見ることも聞くことも出来ない状態にあった。何と云う哀れな、みすぼらしい状態であったのだろう。催眠術にかかった人間の見せるあの愚かな、緩慢な動作――それが結婚して後のあたしの姿であった。そして、三年たった今でも、そういう哀れなあたしは、まだすっかり消えてしまってはいないような気がする。

ともかく、そんな風であったから、あの人の病的なところに気が附かなかったのだと思う。

結婚してから一と月ほどたった頃に、私達二人は大山へ登った。三月の末で、頂上にはまだ少し雪が残っていた。スキーには時期が遅くて、私達の外には逗留の客は一人もいなかった。宿屋の主人の話では、昨夜来の強風で雪が一度に少くなってしまった、もう三日ほど前に来られたら、もっと雪も沢山つもってきれいでしたのに、と云うことであった。実際、雪はざらざらして水分が多く、ほこりを被ったように薄黒くなっていた。その上に風で吹き飛ばされた杉の葉や小枝がいっぱい雪の上に散り敷いていて、雪景色も美しくなかった。

それでも私達は、宿屋のスキーを借りて、宿の裏を流れている河原へ出て滑ったり、林の間を辿って山頂の方へ登攀を試みたりした。人気のない春の山上は、やはり私達にとっては心を楽しませ

てくれる自然のふところと云う感じであった。殊にも大山神社から更に上に登って、北壁と呼ばれる傾斜の下まで行った時は、振り返ると真下に日本海が青くひろがって見え、何とも云えない爽やかな幸福感をあたしは味ったものだ。午後のスキーを終えて宿へ帰ると、すぐにお湯の沸いていることを知らせに来てくれたので、硝子窓越しに谷間の見える湯槽に飛びこんだ。

そんな孤独な自然の中での二人きりの生活の中で、或る晩、あの人はあたしを責め立てて、到頭女学校の頃のクラスエス――Tさんの話をさせた。あたしは本当はTさんとのことは、あの人には話したくなかった。結婚式の時にも招待したし、女学校を卒業する時に一番仲良しの友達であったことだけは、それまでにも話してあった。だけど、どういう風な径路で二人が親しくなり、どんな風な交渉があったかと云うことまで、つまり女学校時代にだけ存在するあのクラスエスと呼ぶ特殊な同性間の愛情について、夫には話したくなかった。知られたくないと云う気持の方がむしろ強かった。それは特に秘密にしなければならない性質のものとは思わないけれど、必要に迫られない限り、結婚してしまった今日では夫にもまた他のどんな人にも云わないで、思い出として自分の心の引出しの中に封じこめて置きたかったのだ。

ところがあの人は、ふとしたきっかけからTさんとの交渉について一部始終をあたしの口からしゃべらせることに、異常な興味を持ち始めた。それはこんな風にして始まった。

明日山を下るという日の夕方――その日は翌日に疲れを残さないようにと云う用心から午後のスキーは早く切上げて宿に帰った。そして風呂が沸くまでの間、部屋で炬燵に入っていた時であった。あの人は前の日から取りかかっていた「大山登攀歌」という詩を書き上げるのだと云って、畳の上にうつ伏しになってノートに書いていた。あたしは武者小路の「美術を語る」という本を開いて読んでいたが、少し退屈して来て、その上にレターペーパーを取出して、鉛筆で兎の絵をかいたり、

意味のない文字を連ねたりした。あたしは前の日から「大山登攀歌」という詩が早く見たくて仕様がなかった。それで、あの人がノートに向っている間は、何をしても気が落着かないのであった。麓の佐磨でバスを降りてから、幅広い真直な道路を二人並んで歩いた。道の両側はなだらかな傾斜の小松原がひろがり、真正面には白い雪をまだらに戴いた大山の嶺が聳え立っていた。太陽は南に傾いて、明るい日の光りが空にも野にもいっぱいに溢れていた。そして振り返ると、遠く日本海が青く霞んで見えた。その風景が、いまどんな風な調べの詩につくられて行っているのか、出来上るのが随分待遠しかったのだ。

ところが、あの人は不意にノートを閉じて、今度は仰向きに倒れるなり、(おい、こっちへ来い!)とあたしを呼んだ。(出来たの?)と、思わず声を立てて、炬燵から飛んで出るようにしてそばへ行くと、いきなりあの人はあたしの肩に手をかけて、横倒しにしようとされた。胸の中へ抱き込まれながら、(出来たの? 見せて)と云うと、あの人は(大山登攀歌なんて止めちまえ! おい)と云って、いきなりあたしに接吻して来た。あたしは、うまく行かないのでいらいらしたのだと、その時思った。しかし、永い接吻のあとで、あの人の口から出た最初の言葉は、意外にもあたしがあんなに完成をたのしみにしていた詩のことではなかった。

(おい、ひろこ、お前Tさんに抱かれたことがあるだろ?)

あたしは、はっと驚いた。日記を見られたな、とその時、あたしは感じた。あたしは女学校の四年の時からの日記帳を全部持って来ていた。そしてあの人に、(見たかったら、どこでも見ていい)と云ったことがある。その時あの人は、(人の日記見たって、仕様がないよ)と云われた。あたしは自分の過去の何もかも一切をあの人の前に差出して、少しもやましくないと云う気持からそう云ったのであった。決して読んでほしいという気持はなかったけれど、読みたいという好奇心をあの人

が抱くなら、何処を見られても構わなかった。恥しかったけれど。

あたしはTさんとのことも、すっかり日記の中に書いてあった。あたしはあの人の言葉を聞いた時、日記のその部分を読まれたなと思った。しかし、その直感は誤っていた。あの人は何も知らなかった。ただ不意にそのようにTさんのことを聞いただけであった。そして、それがあたしのTさんとの思い出の中でも一番秘密にしたかった場所に触れたのであった。

あたしはたった一度だけTさんに抱かれたことがある。修学旅行で東京の宿屋に泊った晩のことだ。あたしはそのことをあの人に話した。夜中に、同じ部屋のグループのお友達がみんな疲れて寝息を立てていた頃、どうしてか知らないけれど、ふっとあたしは目を覚ました。すると、あたしの隣りに眠っていたTさんも——みんな並べた夜具の中へ一緒に寝ていた——眼を開けている気配が感じられた。(ひろちゃん!)低い押殺したような声でTさんが呼んだ。(こっちへいらっしゃい)あたしはその声を聞いた時、今までに一度も味わったことのない感情が足のすみまでひろがるのを意識した。部屋は電燈をつけたままであった。あたしは、今、目覚めているのが自分とTさんとだけであること、その外のお友達は誰も熟睡していることをはっきりと感じていた。あたしの一方の側にはTさんと同じ間隔を置いて、あたしを好いているNさんが眠っていた。あたしはじっとしていた。すると、もう一度、Tさんの低い声が囁いた。(こっちへいらっしゃい)あたしはその声を聞くと、魔法にかけられたように、身体をねじらしてTさんの方へ近寄ろうとした。そしてそれを待っていたようにTさんのバレエで鍛えた腕が伸びて来て、あたしの背中を抱いた。あたしは、何か非常にいけないことをしていると云う意識が頭から離れず、Tさんの顔を見ないで、眼をつむったまま抱かれていた。Tさんは何も云わなかった。背中へ腕を廻しただけで、それ以上近くあたしを抱き寄せようとしないで、黙ってじっとしていた。……Nさんが寝返りを打とうとする気配に、あた

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com